

たじみん昼話 52

勉強するとは、わからなくなることだ

ききょうが携わってきた科学や工学の世界では当たり前に行われていることがある。それは、「わかることはわからなくすること」だ。

これに、大学生のききょうは大いに悩まされた。ある課題を一生懸命考えて解決法を見つけてほっとしていると、「?あれ、これはどういうことだ」と新しい課題が2つ出てくることはざらだった。そして、再び一生懸命勉強して解決法を見つけると、また新たな問題が4つも出てくる。ききょうの大学における研究生生活は、これの繰り返しの日々だった。

勉強は、学習内容を分かるようにするためにやることだと一般に考えられている。しかし、この経験からすると、やればやるほどわからないことが出てくるのが勉強の本質ではないかと思う。つまり勉強とは、「分かるようにすることで分からないことを明確にしていることではないか」とききょうは考えるのだ。

巷で言われているように、新しいことがわかることは嬉しいし、楽しいことだと思う。それが学びのモチベーションになることもあるだろう。でも、それが永遠に繰り返されるとするとどうだろう。かなりの精神力の持ち主でないとやっていけないのではないだろうか。いや、ここに喜びを見出す能力がなければ研究や勉強の継続そのものが、かなり大変なのではないだろうか。

でも、高校の学習は大丈夫だ。世間の勉強と高校生がやる勉強は明らかにその形状が違うからだ。それは、対象範囲が決まっていて、さらに必ず解答が存在するからだ。大学入試は、文部科学省が作っている学習指導要領の中から出題するという制約があり、模擬試験だろうが、本番の受験問題だろうが、全てこの制約の中に解答は存在するからだ。(でなければ評価ができない)

ただし解答は容易ではない。同じ内容でも、様々な角度から出題されるからだ。だから、準備はしっかりとしておかなければいけない。ゲームをやっている時間はないはずだ。